

第66話 (52頁) 雌牛

マリヤという未亡人が、自分の母親と6人の子どもたちといっしょに暮らし
ていました。まずしい暮らしでした。けれども、子どもたちに牛乳をやろうと、
さいごのお金で茶色の雌牛を買いました。上の子どもたちが野原で牛にえさをや
り、家では水をやりました。あるとき、お母さんがよそに行っているときに、上
の男の子のミーシャがパンをとろうとたなにはいあがろうとして、コップを落と
してわってしまいました。ミーシャはお母さんにしかられるのがこわくて、コッ
プの大きなかけらをひろいあつめると、中庭にもちだして、たい肥の下にうめ、
小さなかけらをぜんぶあつめると、たらいの中にすてました。お母さんがコップ
のないのに気づいてたずねましたが、ミーシャは口をきかなかったので、そのこ
とはそのままになってしまいました。

つぎの日お昼ごはんのあとに、お母さんが牛にたらいの水をやりにいってみる
と、牛は元気がなく、えさも食べません。牛を元気にしようと、おさんばさんを
よびました。おさんばさんは言いました。

「この牛は助からない。ほふって、肉にするしかないよ。」

お百姓をよんで、牛をたたきはじめました。庭で雌牛のうなる声がきこえまし
た。子どもたちはみんなだんろにあつまってなきました。雌牛はほふられると、
皮をはがれ、切りきざまれましたが、そののどからガラスが見つかりました。

こうして、牛が死んだのは、水にはいていたガラスのせいだったことがわか
りました。ミーシャはこのことを知ると、わっとなきだして、お母さんにコップ
のことを話しました。お母さんはなにも言わずに自分もなきだしました。おかあ
さんは言いました。

「雌牛を死なせてしまったね。もう買うお金はないし。牛乳なしで、どうやって
小さい子どもたちを食べさせていこうか。」

ミーシャはもっとひどくなきだして、みんなが牛の頭からつくったにごりを
食べているときも、だんろの上からおりてきませんでした。ミーシャは毎日こん
なゆめを見ました。ワシーリーおじさんが、死んだ雌牛の茶色い頭を、つのを
つかんでぶらさげています。牛の目はあいたままで、赤いくびをしています。その
ときから、子どもたちは牛乳がなくなりました。ただお祭りのときにマリヤがと
なりの人たちに牛乳を1ぱいわけてもらおうときだけ、牛乳を飲むことができました。

あるとき、この村の地主のおくさんに、子どもの子守がひつようになりました。
おばあさんがむすめに言いました。

「行かせておくれ。わたしは子守に行くよ。おまえひとりになるけれど、子ども

のせわはきっと神さまが手伝ってくださる。神さまのおぼしめしだ、わたしは雌牛を買うために1年はたらくよ。」

そうすることになりました。おばあさんは地主のおくさんのところへ行ってきました。マリヤは子どもたちをかかえて、いっそうたいへんになりました。そして、子どもたちは牛乳なしでまる1年くらしました。食べるものはゼリーとおかゆだけでしたから、やせて青白くなりました。

1年がすぎて、おばあさんが20ルーブルをもって帰ってきました。

「ほら、おまえ」と、おばあさんが言いました。「これで雌牛を買おう。」

マリヤはおよろこび、子どもたちもおよろこびでした。マリヤとおばあさんは雌牛を買いに市場にでかけるしたくをしました。子どもたちのせわは、となりのおばさんにたのみ、となりのサバルおじさんには、いっしょについてきて牛を選んでほしいとたのみました。神さまにおいのりをして、町にでかけました。

子どもたちはお昼をすませると、牛がこないか見るために通りへでました。子どもたちは、どんな牛だろう、茶色だろうか、それとも黒だろうかと言いあいました。えさはどんなふうによろうかと話しました。子どもたちはずっと待ちつづけて、まる1日待っていました。牛をでむかえに1キロも先まで行きましたが、くらくらしてきたのもどってきました。ふいに、通りをおばあさんが荷車にのってやってくるのが見えました。うしろの車輪のところに、つのをしばられたぶちの牛が歩いてきます。そして、そのうしろからお母さんが木のえだをふって、牛を歩かせてきます。子どもたちはかけよって、牛をしげしげとながめました。草をあつめて食べさせました。お母さんは家にはいると服をぬぎ、タオルとおけをもって庭にでてきました。お母さんは牛の下にもぐると、乳をふきました。そして、目をかがやかせて、乳をしぼりはじめました。子どもたちはわになってしゃがみ、牛乳が乳からおけのへりにほとぼしりでのをながめていました。お母さんはおけを地下の食料おきばにもっていくと、夕ごはんのように子どもたちのコップに牛乳をついでやりました。

「アーズブカの中では、文章がとても長い部類だね。内容は豊かで、すごく分かりやすい。しかも『めでたしめでたし』のハッピーエンドときている。」

「確かに読みやすい。ストーリーがどんどん展開して、それも時系列で描かれている。」

「牛乳は、子どもたちを育てていくために大事で最低限の栄養源なのかな。第59話『見つけた』(35頁)でも、貧乏な祖母と孫娘は掘り当てた銀貨の宝物で、やっぱり牛を買い求めていた。」

「そんな大事な雌牛を、上の男の子のミーシャが自分の落ち度で死なせてしまった。間違っ

で割って飛び散ったコップの破片が牛の喉に突き刺さっていた、というのだから、ミーシャのショックはとても大きかった。」

「そこで初めて、コップを割ったことまで全部自分から打ち明けた。そのときのお母さんの対応だけ、『なにも言わずに自分もなきだしました』とあるだけだ。『なぜ、もっと早く言わなかったの』って責めてはいない。」

「叱ったり、責めたりするのが普通の母親だろうが、とても落ち着いている。」

「ほかの子どもたちはどうだったのかな。アーズブカでは触れていないけど。」

「責められなかっただけ、ますますミーシャは追い込まれた気持ちになっていった。その様子もなかなかリアルに描かれている。」

「みんなが牛の頭の煮凝りを食べていても、とても加わる気になれなかった気持ちは、よく理解できるよ。」

「ミーシャの見た夢も迫力がある。『死んだ雌牛の茶色い頭を、つのをつかんでぶらさげている』ワシーリーおじさんって、目の前に浮かんでくるようだ。」

「このワシーリーおじさんは、ひょっとして、もっと前に出てくる、牛をたたいてほふった『お百姓』と同じだったりして…」

「ロシア児童文学者の松谷さやかさんは、『緑の杖』の中で、この話も取り上げていて『少年の複雑な心理状態が描かれ、読者は主人公の思いを共有し、ともに悩み苦しみます』と解説している。」

「さらに、ミーシャがもっと早く打ち明けていれば、こんな不幸なことは起きなかった、といった直接的な書き方はしないのがトルストイ流だ、と松谷さんは続ける。『主人公の心の動きを追うことで読者がモラルを学び取ることを期待している』と、ね。」

「当時のロシアの農村ではあまり仕事がなかったのかな。地主の家で子守が必要になって、おばあさんが1年間の住み込み仕事に手を上げた、というのだから、それまでは、働こうと思っても働く場がなかったことになる。」

「そして、おばあさんの目算通り、1年で20ルーブルをためて、これで雌牛が買えると家へ帰ってきた。」

「市場で新しい雌牛を買って戻ってくるのだが、それを心待ちして、子どもたちは1ヶ月前まで迎えに行く。その心躍らせて待っている場面もビビッドだよ。でも、気をもませて、肝心の牛はなかなか現れない。」

「じれったい思いがよく伝わってくる。こういう表現法は、本当に巧みだ。」

「雌牛1頭が20ルーブル。第50話『お百姓と王様のめしつかい』(29頁)、第57話『商人と工員さん』(33頁)でも触れた換算レートによれば、2万円から40万円と幅がある。最も高い40万円ぐらいが妥当な気もするけど、換算は難しいとつくづく思うよ。」

「農民はやっぱり、どんな時でも神さまに頼るといふか祈っている。『神さまが手伝ってください』『神さまのおぼしめしだ』『神さまにおいのりをして(でかけました)』というように使われている。」

「牛では、ガラスの破片で死んでしまった最初の牛だけ、原文ではブリョーヌシュカと名前があった。日本語訳では、あえて削ったのだろうが、ない方が効果的だ。」

「ミーシャと母親のマリヤの名前は必須だ。でもワシーリーおじさん、ザハールおじさんは本当に必要なあ。」

「最初にハッピーエンドという言葉が出たように、子どもたちみんなが母親の搾った牛乳をコップに注いでもらったところで終わる。まさに大団円だ。」

「でも、ミーシャの気持ちはどうだろう。このときもまだ、心の中では自分の落ち度を忘れず、引きずっている気がする。」

「ミーシャはみんなから責められないだけ、心の傷もかえって深くなっていく。歳月が過ぎても、ずっと心に重くのしかかっている。」

「翻ってミーシャの立場から考えたら、一概にハッピーエンドとは決めつけられないか。」

「責める立場の人たちも、もう過去のことだと割り切って気にしていないのでは。そうとわかったら、ミーシャだってずいぶん気持ちが和らぐと思うなあ。」

<参考>

松谷さんの指摘箇所は、日本トルストイ協会報「緑の杖」第10号所収、「レフ・トルストイとロシアの児童文学—『アズブカ』『ロシア読本』をめぐって—」34頁に載っています。